

教材研究と教材の扱い方(3)

——大和物語第百五十六段「姨捨」——

菅原敬三

一
大和物語第百五十六段を取り上げてみたい。この段は古来「姨捨」として有名な段である。本文を引用する。

信濃の國に更科といふところに、男すみけり。わかき時に親死にければ、をばなむ親のごとくに、若くよりあひそひてあるに、この妻の心いと心憂きことおほくて、この姑の、老いかゞまりてゐたるをつねにくみつゝ、男にもこのをばのみ心さがなく悪しきことをいひきかせければ、昔のごとくにもあらず、疎なること多く、このをばのためになりゆきけり。このをばいといたう老いて、二重にてゐたり。これをなほこの嫁ところせがりて、今まで死なぬこととおもひて、よからぬことをいひつゝ、「もていまして、深き山にすてたうびてよ」とのみせめければ、せめられわびて、さしてむとおもひなりぬ。月のいと明き夜、「嫗ども、

いざたまえ。寺に尊き業する、見せたてまつらむ」といひければ、かぎりなくよろこびて負はれにけり。高き山の麓に住みければ、その山にはるぼるといりて、たかきやまの峯の、下り来べくもあらぬに置きて逃げてきぬ。「やや」といへど、いらへもせでにげて、家にきておもひをるに、いひ腹立てけるをりは、腹立ちにかくしつれど、としごろおやおやの如養ひつゝあひ添ひにければ、いとかなしくおぼえけり。この山の上より、月もいとかぎりなく明くていでたるをながめて、一夜ねられず、かなしくおぼえければかくよみたりける。わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月をみて

とよみて、又いきて迎へもて来にける、それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたしとはこれがよしになむありける。

(日本古典文学大系「大和物語」)
この話は、姨捨山の地名起源説話の一つであるが、古今

和歌集卷十七雜歌上（八七八）「よみ人しらず」の歌「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて」を題材にして作られた話でもあろう。「長野県 更科（郡）の姨捨山に照る月を見て、旅の空にある自分の心は慰めようとしても慰めきれない」というのが歌の意味である。わざわざ「更科や」と呼び掛けたところに、その土地になじんでいない旅人の心が伺える。また、今昔物語三十「信濃国の姨母棄山の語、第九」にも、この話と同一の話がせられている。

二

この本文は、嫁と姑（本文の場合は、男の養い親である「をば」）の確執、両者の間にはさまれて苦悩する夫の姿が描かれており、現代にも通じるテーマが材料とされている。教材研究をするにあたって、筋をおさえるだけでは不十分であり、登場人物の人物像を的確にとらえること、また、登場人物の心理を丁寧に分析することが必要となる。

「（男の）わかき時に親死にければ、をばなむ親のごとくに、若くよりあひそひてあるに」とあるように、「をば」はこの「男」にとって養い親である。「男」の「わかき時」に親が死んだこと、また、「若くより」とは「をば」の年齢を言っていることを考えれば、この「をば」は自分のこととは顧みず「男」のことを心底心配する優しい人柄であることが伺える。その「男」と「をば」との間を裂いたのは、

「妻の心」である。このあたりかなりパターン化した人物造形が伺えるが、「姨捨」にまでもっていかなければならぬことを考えれば、「妻」を悪者に仕立てることが読者の通りもよかったのであるろうか。作者の意図が伺えるところである。「妻」が「をば」を嫌い、夫に「姨捨」を強要するまでの経緯をたどってみることにしよう。

「をば」が「男」にとってかけがえない存在であることを知っていながら、「この姑の、老いかゞまりてゐたるをつねにくみつ」とあるように、「妻」は姑の老醜を嫌ったのである。本文の別の箇所でも「このをばいといたう老いて、二重にてゐたり」と姑の老醜が説明されている。姑の老醜を嫌ったのが「姨捨」の発端である。老醜を嫌うこと自体「妻」の心根の悪さを物語っているが、順に「妻」の心理の伺える箇所を拾いだしてみよう。

。「この姑の、老いかゞまりてゐたるを」 つねにくみつゝ、
。「男にもこのをばのみ心さがなく悪しきことをいひきかせければ」、

。「このをばいといたう老いて、二重にてゐたり。」これをなほこの嫁とくろせがりて、「今まで死なぬこととおもひて、よからぬことをいひつゝ」「もていまして、深き山にすてたうびてよ」とのみせめければ」

「妻」の心理は、二段階に整理される。まず、姑の老醜を嫌うようになったこと、次いで、自分達の目の前から

何とかして遠ざけようとしたことである。遠ざけるためにこの「妻」のしたことは、「男にもこのをばのみ心がなく悪しきことをいひきかせければ」とあるように、まず夫に「をば」が「意地が悪い」ことの告げ口をし、「よからぬことをいひつゝ、『もていまして、深き山にすてたうびてよ』とのみせめければ」と日々姑の悪口を言い続け「姨捨」を強要するまでにエスカレートしていったのである。意識的・作意的な意味を持つ完了の助動詞「つ」の命令形「てよ」と限定の意味を持つ副助詞の「のみ」がよく効いた表現になっている。「妻」の心理の変化を追う上で是非ともおさえておかなければならない文法事項である。

一方、「男」の方はどのように心変わりしていったか。この「男」の心理も二段階にまとめられる。「姨捨」を決定するまでと、「姨捨」決行後後悔して「をば」を連れもどし一件落着を見るまでである。まず第一段階を見よう。「昔のごとくにもあらず、疎なること多く、このをばのためになりゆきけり」が、最初に見せた「男」の心変わりたの姿である。「をば」が親代わりに自分を大切に養育してくれた人間であることを十分認識しておきながら、新しく自分と共に生活する人間（妻）の価値体系を認めて、今まで共に生活してきた人間（をば）を疎略に扱ってしまう。こういうことは人間生活にはよく起こることであろう。古い価値観より新しい価値観の方が新鮮に映り、両者の価値観の検討を十分行わないまま新しい価値観を安易に受け入

れることが人間生活には起こりうる。特別「男」が悪い人間であるという訳ではなく、人を信じ安い善良な人間であることを物語っている。「昔のごとくにもあらず、……このをばのためになりゆきけり」からは、度重なる「妻」の告げ口の効果が現れ、「男」の心変わりが時間的に推移していったことが読み取れる。

次いで「このをばいといたう老いて、二重にてゐたり。これをなほこの嫁ところせがりて、今まで死なぬこととおもひて、よからぬことをいひつゝ、『もていまして、深き山にすてたうびてよ』とのみせめければ」という「妻」の言葉に接して、「男」は「せめられわびて、さしてむとおもひなりぬ」となってしまふ。ここで注意しなければならぬのは、「せめられわびて」と「さしてむとおもひなりぬ」の表現である。「せめられわびて」とは、すぐに「妻」の言葉を「男」が受け入れた訳ではなく、結論を出すまでの時間的経過と「男」の苦悩・葛藤が浮き彫りにされている。「妻」から「姨捨」を催促され続けた「男」の苦悩がにじみ出ている。しかしながら、「男」のいきついたところは、「さしてむとおもひなりぬ」である。「さしてむ」とは、「て（意識的・作意的の完了の助動詞）む（意志の助動詞）」によって、積極的に「姨捨」を行おうという「男」の決心を物語っている。しかも「おもひなりぬ」とは、「ぬ（無意識的・自然的の完了の助動詞）」によって、「姨捨」を決心するまでの過程が自然に推移していったということを物語る。

「男」の気持ち「をば」から離れてしまっており、気持ちが離れてしまえば相手を冷静に眺められる。「をば」は醜いのであり、邪魔なのである。邪魔なものは始末しておうという「男」の残忍な心変わりの姿をとらえておかなければならない。

「姨捨」を実行するに際して、「男」が選んだ条件と言葉は次の如くである。

「月のいと明き夜、『姫ども、いざたまえ。寺に尊き業する、見せたてまつらむ』といひければ」というものである。「姨捨」に際して、「男」が最も心を碎かなければならなかったことは、「をば」を誘う言葉に速効性があり、またその言葉を通して絶対の信頼を相手からちとらなければならぬ点である。相手に疑いの気持ちを持たせてはならないのである。こういう点では、先の「男」の言葉は二つの点でよくできている。一つには「月の明き夜」という条件を選んだことであり、二つには「寺に尊き業する、見せたてまつらむ」という法会を考え付いた点である。「月の明き夜」とは、仲秋の名月のことである。そして、名月のもとでの尊い法会を「見せたてまつらむ」という「男」の言葉を聞いて「をば」は喜んだにちがいない。老境の者にとって、「寺の尊き業」こそこの世で望む最高の贈物であったからである。「かぎりなくよるこびて負はれにけり」には、無条件で喜ぶ「をば」の姿がある。また、日頃の「男」の冷淡さが、「をば」の喜びを倍加させていること

もおさえておかなければならない。やはり、自分のことは忘れていた訳ではなかったのだという「をば」の喜びの気持ちが読み取れる。この「男」の誘いの言葉は、表面は「孝行」でありながら、内実は「姨捨」である。「高き山の麓に住みければ、その山にはるばるといりて、たかきやまの峯の、下り来べくもあらぬ」所まで連れていかれても「をば」は「男」の行動を疑ってはいない。「高き山にはるばるといりて、たかきやまの峯の、下り来べくもあらぬ」所まで「をば」を連れていくことは、「姨捨」を完全なものにしようという「男」の考えを物語る。そして、「をば」の「やや」という言葉に「いらへもせで」「家に」逃げてきて「姨捨」は実現するのである。ここまでが場面的には一場面であり、「男」の心理面でも第一段階である。次いで、「家にきておもひをるに、いひ腹立てけるをりは腹立ちてかくしつれど、としごろおやの如養ひつゝあひ添ひにければ、いとかなしくおぼえけり」が、家に帰り着いての「男」の気持ちである。良心の呵責による反省には違いないが、その反省を導きだした一つのきっかけになっているのが、「山の上」に昇ってきた「かぎりなく明」る「月」である。自分の見ている「山の上」の月を、「をば」もまた見ているであろうという「男」の気持ちが、「男」と「をば」と結び付けている。「月もいとかがりなく明くいでたるをながめて、夜一夜ねられず」には、一晚中苦しみぬいた「男」の苦悩がにじみ出ている。歌の「なくさ

めかねつ」と関連させておさえておかなければならない箇所である。結末の「それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたしとはこれがよしになむありける」は、「姨捨山」命名の由来を物語る。

三

以上の教材研究を踏まえて、次のように学習指導案をたててみた。

指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<ol style="list-style-type: none"> 1. 本時の目標を明らかにする。 2. 通読する。 3. 登場人物を明らかにする。 (基本構造Ⅰ) 4. 会話の住体者を明らかにする。 (基本構造Ⅱ) 5. 「男」と「妻」の心理・行動を読み取る。 <p>(1) 「妻」が「をば」を嫌う理由をとらえる。</p> <p>(2) 「妻」の人となりをとらえる。</p>	<p>教材 「大和物語」第百五十六段〔姨捨〕</p> <p>指導目標 1、事件の展開に注目させ、登場人物の人物像と心情をとらえさせる。</p> <p>2、和歌と地の文とのかかわりを理解させ、歌物語の特徴をとらえさせる。</p> <p>3、心情語や助動詞の働きに注目させ、登場人物の心情をとらえさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の人物像と心情について考えることを明示する。 ・心情語や助動詞の働きに注目することを明示する。 ・一名に指名読み ・通読後、登場人物ならびに会話の主体者が明らかにできるように注意を促す。 ・「をば」、「男」、「妻」をとらえさせる。 ・三者の関係をとらえさせる。 ・第一の場面での会話の主体者を、まず明らかにする。 ・三者の関係が構造的になるように板書する。 ・「をば」の姿が「老いかがりてふたへにてゐたり」(『老醜』)であることをとらえさせる。 ・「妻」の心が「憂きことおほし」であることをとらえさせる。

(3) 「捨てたうびてよ」に至るまでの「妻」の心の変化をとらえる。

(4) 「男」の反応をとらえる。

6. 「男」と「をば」の心理・行動を読み取る。

(1) 「男」が「をば」を誘った時の状況と誘った理由をとらえる。

(2) 「をば」が「かぎりなくよること」んだ理由をとらえる。

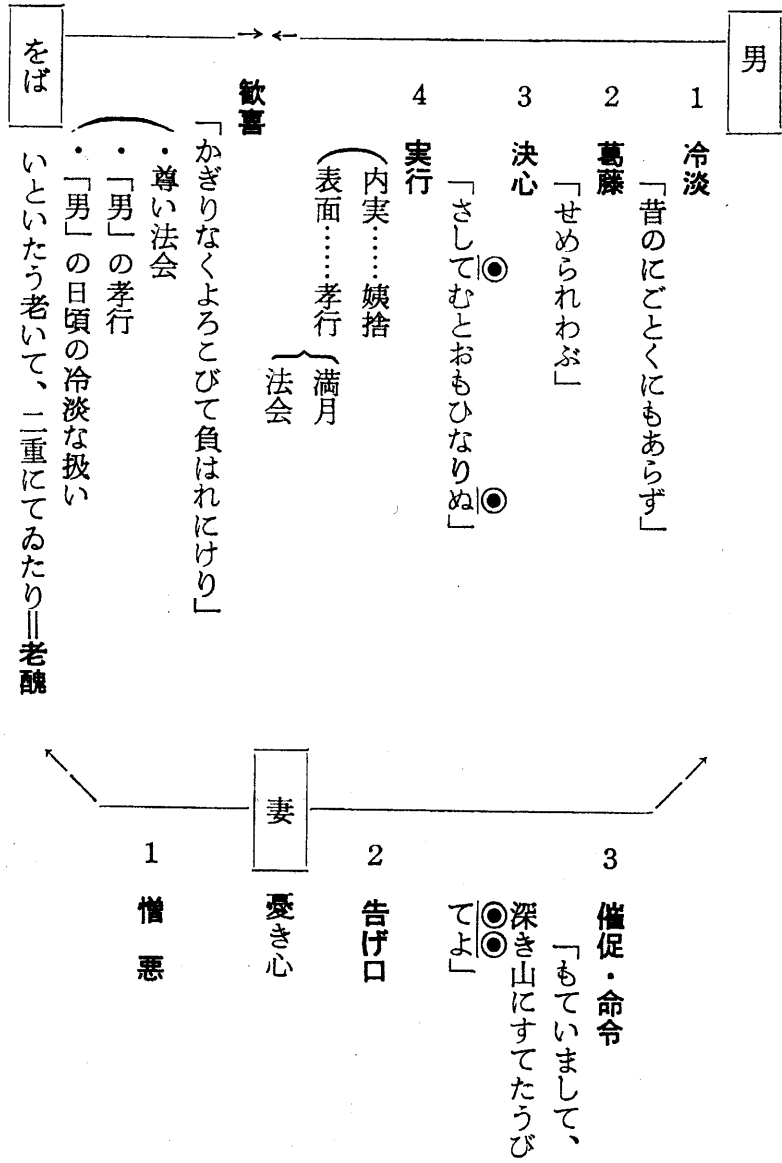
7. 「男」の後悔する姿をとらえる。

8. 歌物語の特徴をとらえる。

9. 覚醒した「男」の姿をとらえる。

- ・段階的に深まりを見せていることをとらえさせる。
- ・「妻」の言葉を口語訳させ、どれほどの気持ちがあるか気付かせる。
- ・「てよ」が「意識的・作意的」な意味を持つことを説明し、「妻」の言葉には「催促・命令」の意味合いがあることをとらえさせる。
- ・「妻」の言葉が「男」にどのように影響していったか順を追ってとらえさせる。
- ・「冷淡」から「葛藤」へ、「葛藤」から「決心」へ、「決心」から「実行」へと変化していった姿をとらえさせる。
- ・「さしてむと思ひなりぬ」の中で、完了の助動詞「つ」「ぬ」が効果的に使用されていることに気付かせる。
- ・「月のいと明き夜」に「男」が「をば」を誘った意味合いを考えさせる。
- ・「寺に尊き業する」という言葉が、「をば」を歓喜させることを「男」は十分知っていたことをとらえさせる。
- ・「男」の言葉は、表面は「孝行」でありながら内実は「嫉捨」であることをとらえさせる。
- ・「男」の孝行に加えて、日頃「男」が「をば」に冷淡になっていたことに気付かせる。
- ・山からもどって悩む「男」の姿を、「かなし」「ながむ」「夜一夜ねられず」を通して浮き彫りにする。
- ・「をば」を連れもどす契機が「月」であることをとらえさせる。
- ・和歌と地の文とのかわりに注目させ、和歌に集約された「男」の心情をとらえさせる。
- ・和歌を境にして「男」が昔の心を取り戻していることをとらえさせる。

次に、「姨捨」に至るまでの板書を示してみる。



完了

「つ」……意識的・作意的
「ぬ」……無意識的・自然的

わぶ………思い悩む、悲しく思う、困る